

順序助詞句「AからBまで」について

茂木 俊伸

『筑波応用言語学研究』7

(2000年12月)

pp.29-42

順序助詞句「AからBまで」について

茂木 俊伸

キーワード：「まで」、「から」、順序助詞、数量詞遊離、同格要素

1. はじめに

従来多くの研究において副助詞に分類されてきた「まで」は、またさまざまな用法を持つことが指摘されてきた。奥津(1966)における現代日本語の「まで」の記述では、(1)-(4)のような4種の「まで」が認められている¹。

(1) 格助詞の「まで」:

a. 御用の方は係までお申し出ください。² (奥津(1966),p.24:(5))

b. タクシーで新宿まで行きました。 (同:(7))

(2) 順序助詞の「まで」:

a. 私は5時から6時まで甲州街道をドライブした。 (同,p.27:(15))

b. (受験生のうち)1番から50番までこの部屋に居る。 (同:(19))

(3) 強調の「まで」:

いくら困ってもあいつにまでは助けてもらいたくない。 (同,p.44:(110))

(4) 形式副詞の「まで」:

残虐なまで(に)写実的な絵 (同,p.45:(114))

品詞論的な問題はさておき、「まで」に関するこれまでの記述としては、格助詞の「まで」や強調の「まで」(とりたて詞の「まで」(cf.沼田(1986)))を取り上げたものは比較的多いが、この他の2種の「まで」に関する個別的な分析は未だ不十分な状態にあると言える。

本稿は、このうちの順序助詞の「まで」に関する現象の観察及び整理を行うものである。以下では、奥津(1966)の記述の再検討を通し、順序助詞「まで」を含む句には数量詞的な性質を持つタイプのものだけでなく一種の同格要素と同様の統語論的特徴を示すタイプのものが存在すること、これらの2つのタイプの区分³が基本的に「AからBまで」で表される範囲の「集会的/非集会的」という把握のあり方の差と対応することを指摘する。

2. 順序助詞句の意味論的特徴

順序助詞の「まで」は、典型的には、「から」とセットになった「AからBまで」の形で現れる。以下、この形を「順序助詞句」と呼ぶことにする⁴。

この順序助詞句に関して、奥津(1966)は、量的表現(以下、「数量詞」とする)との意味・統語両側面における類似性を指摘している。本節では、この順序助詞句の数量詞的な特性について、まず意味論的な観点からの検討を行う。

2.1 意味的同格関係

順序助詞句の数量詞との近接性は、特に両者が共起する構造において確かめられる。

(5) 甲州街道を5時から6時まで1時間ドライブした。 (奥津(1966),p.31:(52))

奥津(1966)によれば、このときの順序助詞句と数量詞との関係は、次のように捉えられる。

(6) 「1時間」「200キロ」「50人」などは、数量を端的に数字を使って表わしているのに対し、「カラ」と「マデ」による表現は、その数量の始点と終点とを示して、中間には空虚な領域を残し、間接的にその数量を示しているのである。要するに両者は、同一の数量を、ちがう表現で示すものと言える。 (同,p.31)

言い換えれば、「同格または言いかえの趣き」(同,p.32)を持つこの両者は、次のような関係にあると言える。

(7) 順序助詞句によって表される範囲・数量 () = 数量詞で表される数量 ()

ただし、実際にこの関係が保たれるのは順序助詞句と数量詞の両方が連体修飾成分もしくは連用修飾成分となっている場合であり、両者が異なる位置に分離される場合には、(8c-d)のようにそれぞれの要素が別の数量(ある数量とその部分数量)を表しうる。

- (8) a. 7月から8月まで2ヶ月の休みをムダにした。 (=)
b. 休みを7月から8月まで2ヶ月ムダにした。 (=)
c. 7月から9月までの休みを1ヶ月ムダにした。 (>)
d. 3カ月の休みを7月から8月までムダにした。 (<)

したがって、順序助詞句と数量詞との「同格」関係は、これらが同一の構文的機能を果たす場合、という条件の下に保証されると言える⁵。

2.2 順序集合の把握可能性

奥津(1966)は、順序助詞句(が表す数量)を、「から」「まで」が両端の要素を示す「順序集合」(p.32)としての把握の可能性から、次のような2つのタイプに分けている。

- (9) a. 順序助詞句が表す数量が集合論的に捉えられる(要素が分離できる)場合：
有限個の要素から構成される順序集合の初めと終わりの要素を明示することによって集合全体が表現される。⁶
- b. 個々の要素の集合と見ることができない場合(距離、期間、度合等)：
分離不可能な量はその始点と終点を挙げることによって示される。

これは、(9a)のタイプの順序助詞句の場合、その文において順序集合内の要素すべてに関して同一の叙述が成立する、と捉えることができるのに対し、(9b)のタイプはこのような捉え方ができないということを示している。このことは次の(10)(11)において確認される。

- (10) a. 先週の授業では太郎から花子までが当てられた。(P(x) : xが当てられた)
b. 太郎が当てられた + 次郎が当てられた + ... + 花子が当てられた。
- (11) a. 2時から5時までが休み時間だ。(Q(y) : yが休み時間だ)
b. *2時が休み時間だ + 3時が休み時間だ + ... + 5時が休み時間だ。

以下、前者のようなものを「集合タイプ」、後者を「非集合タイプ」の順序助詞句と呼ぶことにする。この「集合/非集合」という順序助詞句の2つのタイプの区分は、次のような数量に関係した現象にも反映される。

よく知られているように、数量詞が同一文中に複数現れる場合、次の(12)のようにいわゆる「集合読み(collective reading)」と「個別読み(individual reading)」の(少なくとも)二つの読みが可能である。

- (12) 3人の学生が4つの机を運んだ。
- a. 集合読み : 3人の学生が一緒に4つの机を運んだ。(机の最大数 : 4)
- b. 個別読み : 3人の学生がそれぞれ4つの机を運んだ。(机の最大数 : 12)

順序助詞句では、2つのタイプのうち集合タイプに関して同様のことが言える⁷。

- (13) 太郎から花子までが4つの机を運んだ。
- a. 集合読み : みんなで一緒に4つの机を運んだ。(机の最大数 : 4)
- b. 個別読み : それぞれが4つの机を運んだ。(机の最大数 : 人数 × 4)

このとき、このような2つの読みに対応して、順序集合内の要素を総体的に計量する(「全部/全員で」解釈)ことも、要素を個別的に計量する(「それぞれ」解釈)こともできる。

- (14) a. 太郎から次郎までが(総計)300キロだ。
b. 太郎から次郎までが(それぞれ)50キロだ。

一方、時間や空間の幅、度数等を表す非集合タイプに当たる順序助詞句は、要素が個別に分離不可能である以上、(13)のような読みの曖昧性はなく、計量方法についても総体的な計量に限定される。

- (15) 3時から5時までが2時間(まるごと)空いている。⁸
(16) スタートからゴールまでは(計)200メートルある。

3. 順序助詞句の統語論的特徴

続いて、統語論的側面における順序助詞句と数量詞との類似性について、奥津(1966)の記述を再検証しながら具体的に現象を見ていく。

3.1 分布

一般に、数量詞は、格成分/連体修飾成分/連用修飾成分のいずれにもなりうる。

- (17) 太郎は3日間を単語の暗記に費やした。(格成分)
(18) a. 花子は5日間の休みを取った。(連体修飾成分)
b. 花子は休憩を3時間もらった。(連用修飾成分)

順序助詞句も、非集合タイプの場合、これと同様の分布を見せる。

- (19) 太郎は試験3日前から前日までを単語の暗記に費やした。
(20) a. 花子は7月15日から19日までの休みを取った。
b. 花子は休憩を3時から6時までもらった。

また、先の(5)のように、この両者は共起可能である⁹。

- (21) 太郎は試験3日前から前日まで3日間を単語の暗記に費やした。
(22) a. 花子は7月15日から19日まで5日間の休みを取った。
b. 花子は休憩を3時から6時まで3時間もらった。

一方、集合タイプの順序助詞句の場合、分布に制限が存在する。

(23) その催しには、小さな子供からお年寄りまでが参加した。

(24) a. ?太郎から花子までの料理が得意な学生が手伝ってくれた。

b. *料理が得意な学生が太郎から花子まで手伝ってくれた。

まず、集合タイプの順序助詞句が連体修飾成分となる例では、(24a)のように許容度がやや下がる場合がある¹⁰。そして、集合タイプの順序助詞句においてさらに特徴的なのは、(24b)のような連用修飾成分としての用法が許容されないという点である。

このような分布に関する順序助詞句の振る舞いの差、とりわけ連用用法における許容度の差は、その数量詞としての性質、特に遊離の可否に関してこれらのタイプによって差があることを示している。次に、この問題を改めて取り上げる。

3.2 数量詞遊離

数量詞は、いわゆる数量詞遊離と呼ばれる次の(25a)のような現象を伴う。

(25) a. 哲学の本を 30 冊読んだ。 (奥津(1966),p.38:(74))

b. 哲学の本 30 冊を読んだ。 (同:(75))

c. 30 冊の哲学の本を読んだ。 (同:(76))

奥津(1966)は、順序助詞句にもこのような遊離を認めている。

(26) a. 哲学の本をプラトンからサルトルまで読んだ。 (同,p.37:(68))

b. 哲学の本プラトンからサルトルまでを私は読んだ。 (同,p.38:(71))

c. プラトンからサルトルまでの哲学の本を読んだ。 (同:(73))

しかし、筆者の判断は(26)と異なり、順序助詞句(ここでは集合タイプに該当)の遊離を許容できない¹¹。

(27) a. ??哲学の本をプラトンからサルトルまで読んだ。

b. *哲学の本プラトンからサルトルまでを読んだ。

c. ?プラトンからサルトルまでの哲学の本を読んだ。

cf. プラトンからサルトルまで哲学の本を読んだ。

(28) a. 高校生から会社員までボランティアが大活躍した。

b. *ボランティアが高校生から会社員まで大活躍した。

このとき、ホストとなる名詞句に「さまざまな」「各」など、先に 2.2 節で見た順序助詞句の個別読みを支える要素が含まれる場合、このような構文の許容度がより安定する。

- (34) a. 高校生から会社員まで各世代のボランティアが大活躍した。
b. 電車からバスまでさまざまな公共交通機関がこの券で乗り放題になる。

さて、江口(1998a,b)は、この不定的同格要素が数量詞と大きく異なる点として、(32)の前項と後項の語順を逆転できないという制限を指摘している。

- (35) a. 太郎とか次郎とか、学生が来た。 (江口(1998b),p.107:(16a))
b. *学生が太郎とか次郎とか来た。 (同:(16b))
c. *学生、太郎とか次郎とかが来た。 (同:(16c))
d. 太郎とか次郎とか{いった/の/のような} 背の高い学生が来た。(同,p.103:(1c))

この(35)は、先に(27)で示した集合タイプの順序助詞句の分布・遊離の特徴と概ね並行的であると言える¹³。

- (27) a. ??哲学の本をプラトンからサルトルまで読んだ。
b. *哲学の本プラトンからサルトルまでを読んだ。
c. ?プラトンからサルトルまでの哲学の本を読んだ。
cf. プラトンからサルトルまで哲学の本を読んだ。 (再掲)

この他、その前に名詞修飾要素が位置できない(36)、ホストに格の制限がない(37)といった点でも、順序助詞句は不定的同格要素と同様の振る舞いを見せる。

- (36) a. 高校生から会社員まで、復興を支援したボランティアが再び集まった。
b. *復興を支援した高校生から会社員まで、ボランティアが再び集まった。
(37) ヨーロッパの大国からアジアの小国まで、さまざまな国から返事が届いた。

このように、集合タイプの順序助詞句と不定的同格要素には統語論的側面においてかなりの共通性が見出されるが、意味論的側面においては異なる点があるように思われる。

江口(1998b)は、不定的同格要素を「集合を完全に数え上げる形式」であってはならない(p.109)という「不定性」を持つものとする(この点はその名称の根拠ともなっている)。一方、集合タイプの順序助詞句が関与する文では、奥津(1966)において「A、B、C」「Aと、Bと、Cと」のような列挙表現と同じく扱われている(p.32)ように、基本的に順序集合の要素すべてが問題となり、これらすべてについての叙述がなされると考えられる。

ただし、順序助詞句は言語表現上その順序集合の両端の要素のみを示すものであり、順序集合の内実、すなわち両端を除いた中間の要素のあり方（いくつの、どのような要素があるのか）は、明確な文脈が存在しないかぎり確定されない。このことは、順序助詞句に次のような比喩的あるいは強調的とも言うべき用法が存在することからも伺われる。

(38) A社は、(それこそ) 消しゴムからマイホームまで どんなものでも扱っている。

この場合、特定可能な集合内の具体的要素の1つ1つが問題になっているというよりも、一定のスケールの両端として捉えられる2つの要素が象徴的意味合いにおいて表示されている、という点で例示に近い解釈を受けるが、実際に文の叙述の対象となっているのは、この両端の要素と確定されない中間要素を含めた順序集合内の要素すべてである。

このように、順序助詞句は、具体的な集合要素の確定を多かれ少なかれ文脈に依存しながら集合内の要素すべてに関する叙述を行うという点で、集合要素の特定性に関して、全ての要素を明示的に表現する列挙表現とは異なる。

また、順序助詞句が少なくとも不定的同格要素のような「不定」性を持たないということについては、次の2点において両要素に現象的な異なりが見られることが傍証となる。

まず第一に、(39)のように、集合タイプの順序助詞句は文脈を整えることによりすべての要素を数え上げることができるが、不定的同格要素はこのような文脈の有無に関わらず、ホスト名詞句の表す集合に含まれる全ての要素の数え上げは不可能である。

(39) a. 受験番号6番から10番まで、緊張の面持ちの受験生(5人)が面接室に入った。

b. 受験番号6番や10番など、緊張の面持ちの受験生(5人)が面接室に入った。

第二に、次の(40)のような不定詞との共起について、不定的同格要素の場合は全く問題がないが、順序助詞句の場合は不自然になる。この現象は、不定詞と順序助詞句との間に何らかの意味的なミスマッチが存在することを示唆している。

(40) a. 蛇口の水漏れとか雨漏りとか、何かお住まいのトラブルはありませんか？

b.??蛇口の水漏れから雨漏りまで、何かお住まいのトラブルはありませんか？

このように、集合タイプの順序助詞句は、統語論的には名詞句の同格要素としての特徴を示すが、意味論的には不定的同格要素と異なる部分を持っていると言える。

5. 順序助詞句の二つのタイプと数量詞・不定的同格要素

ここまで見てきたように、順序助詞句の集合/非集合という2つのタイプの別は、順序

助詞句が数量詞的な特徴を示すのか、あるいは不定的同格要素的な特徴を示すのかに大きく関与していると考えられる。本節では、ここまでの内容を再確認すると同時に、さらに細かな現象についても触れていく。

5.1 分布と遊離

先に 3.1 節及び 4 節では、順序助詞句が数量詞または不定的同格要素と同様の分布を示すことを示した。数量詞と同様の分布を見せるのは非集合タイプの順序助詞句に限られ、集合タイプの順序助詞句は、不定的同格要素と同様、連体修飾用法を許容しにくい場合があり、連用修飾用法は許容できなかった。また、3.2 節及び 4 節で見たように、非集合タイプの順序助詞句は数量詞と同様に名詞句からの遊離が可能であったが、集合タイプの順序助詞句は遊離を伴わなかった。

以上の内容から確認できるのは、数量詞と非集合タイプの順序助詞句の並行性、及び、不定的同格要素と集合タイプの順序助詞句の並行性である。

ここで、前者の並行性に関連して、非集合タイプの順序助詞句の遊離についての補足の観察を行っておく。次のような例を考える。

- (41) a. 25 歳から 30 歳までの独身男性を募集した。
- b. 35 ページから 58 ページまでの論文を読んだ。
- c. 27 日から 30 日までのそのアルバイトをサボった。

このとき、(41)の非集合タイプの順序助詞句は、奥津(1983)の言う「属性 Q」に対応すると考えられる。この属性 Q の特徴は、数量詞遊離を伴わないという点にある。

- (42) a. 太郎は 2000ccの車を買った。
- b. *太郎は車を 2000cc 買った。

- (43) a. 10 段の階段をのぼる。
- b. #階段を 10 段のぼる。

(奥津(1983),p.79:(26))

数量詞遊離が非文法的になる(42)に対して(43)は文法的ではあるが、階段が 10 段から構成されるという解釈を受ける(43a)と異なり(43b)ではこの解釈が必須ではない((43b)の「#」は(43a)と同義ではないことを示す)。このときの「10 段」のような数量詞は「部分数量 Q」(奥津(1983),p.87)と呼ばれる。

このような現象は順序助詞句の場合にも見られる((8)も参照)。

- (44) a. *独身男性を 25 歳から 30 歳まで募集した。
 b. #論文を 35 ページから 58 ページまで読んだ。
 c. #そのアルバイトを 27 日から 30 日までサボった。

これらのうち、(44b-c)は解釈可能ではあるが、(41b-c)とは異なる解釈(部分数量解釈)になる。ここにおいても、非集合タイプの順序助詞句と数量詞との並行性が確認される。

5.2 ホスト

先に4節では、集合タイプの順序助詞句と不定的同格要素との並行性を示した。

(45) 集合タイプ：

- a. 風邪から盲腸までさまざまな病気を患った。
 b. 風邪から盲腸までさまざまな病気の症例を集めた。

この(45)のように、集合タイプの順序助詞句はそのホストと共に起し、このとき順序助詞句とホスト名詞句は「同格」関係にある。これは不定的同格要素と共通する特徴である。

一方、2.1 節では、奥津(1966)が指摘するような、本稿における非集合タイプの順序助詞句と数量詞とがある種の「同格」的な共起関係にある例を見た。

(46) 非集合タイプ：

- a. 太郎は3時から6時まで3時間待ち合わせ場所で花子を待った。
 b. 太郎は3時から6時まで3時間の待ち時間の中に何回も帰ろうと思った。

この(46)のように、非集合タイプの順序助詞句は数量詞と共に起す。このときの両要素の関係は、集合タイプの場合に倣って言えば、順序助詞句は数量詞と「同格」関係、しかも非集合タイプの順序助詞句が数量詞をホストとする関係にあると言える¹⁴。

このことは、これらの要素の共起に「順序助詞句(非集合タイプ) - 数量詞」の順でなければならぬ(注9参照)という、集合タイプにおける「順序助詞句(集合タイプ) - ホスト名詞句」の語順制約と並行的な現象が存在することからも支持される。

- (47) a. *太郎は3時間3時から6時まで待ち合わせ場所で花子を待った。
 b. *太郎は3時間3時から6時までの待ち時間の中に何回も帰ろうと思った。

つまり、集合タイプの順序助詞句が名詞句の同格要素であるのに対し、非集合タイプの順序助詞句は名詞句からの遊離を許すなど数量詞としての性質を持っているが、その一方

で、同じ数量を表す数量詞と共起した場合はその数量詞の同格要素として分析される¹⁵。この点で、非集合タイプの順序助詞句は数量詞と同格要素の二面性を有していると言える。

なお、集合タイプの順序助詞句が数量詞をホストとしているように見えるケースも存在する。これは、奥津(1966)の挙げる、順序助詞句が遊離した数量詞と共起する例である。

(48) 哲学の本をプラトンからサルトルまで 30冊読んだ。 (同,p.38:(77))

このような環境では、本来遊離が不可能であるはずの集合タイプの順序助詞句と不定的同格要素の遊離位置への生起の許容度がかなり高くなる¹⁶。

(49) 集合タイプ :

a.??花子は夏休みの宿題を計算問題から自由研究まで楽しみながら片付けた。

b. 花子は夏休みの宿題を計算問題から自由研究まですべて楽しみながら片付けた。

(50) 不定的同格要素 :

a.??次郎はおつまみをナッツとかさきいかとか買いこんできた。

b. 次郎はおつまみをナッツとかさきいかとかたくさん買いこんできた。

このとき、意味及び語順から考えると、遊離数量詞が順序助詞句や不定的同格要素のホストであるかのように見える。ただし、遊離位置の順序助詞句 / 不定的同格要素、遊離数量詞、ホスト名詞句という3つの要素がそれぞれ外延、その数量、内包という関係で意味的な連鎖を成していること、実際のホストが何であることを明示的に示す手段がないことから、これらの要素がどのような構造を成しているのかは明確ではない。このような文の構造に関する詳細は今後の分析に譲らざるをえないが、この現象はこれらの要素の性質を考える上で興味深いものであると言える。

6. まとめ

本稿では、奥津(1966)の順序助詞句に関する記述を出発点とし、ここで指摘されている順序助詞句と数量詞との類似性は一応見られるものの、これは順序助詞句の要素が分離不可能な非集合タイプの場合に限られることを示した。また、その一方で、要素が分離可能な集合タイプの順序助詞句は、数量詞よりもむしろ江口(1998a,b)等の一連の研究における不定的同格要素に近い特徴を持っていることを指摘した。

本稿の考察に残された課題は多い。

まず、ここで示した順序助詞句の特性を、「から」「まで」それぞれの特性から捉え直すためにも、順序助詞句の構成要素に関して分析を進める必要がある。

例えば、一見「まで」は順序助詞句において任意性を持つように思われる(51a)が、非集合タイプの順序助詞句の遊離は「まで」なしには実現しない(51c)¹⁷。

- (51) a. { 3時から / 5時まで / 3時から5時 } が自由時間だ。
b. { 3時から / 5時まで / (?) 3時から5時 } の自由時間をもらった。
c. 自由時間を { 3時から / 5時まで / *3時から5時 } もらった。

これは、順序助詞句において「まで」がその数量詞としての特徴を担うことの傍証であると思われるが、否定文におけるスコープ解釈の問題(丹保(1982), 近藤(1983), 堀川(1991)等)を含めて、「まで」自体の数量詞性に関してさらに検討をしていく必要がある。

また、順序助詞句に類する特徴を持つ要素がどの程度他に存在するのを探っていく必要もある。この作業は、従来副助詞として一括されてきた語群を、数量詞あるいは同格要素との共通性に注目しながら再検討していく方法論の有効性の検証でもある。

この点、形式副詞「ほど」(cf. 奥津(1986))の数量詞性を指摘する井本(2000)の分析は興味深い。この「ほど」は、単独で現れることも数量詞と共起することもできる。

- (52) a. マツタケを { 食べきれないほど / たくさん } 持ち帰った。
b. マツタケを 食べきれないほど たくさん 持ち帰った。
c. ??マツタケを たくさん 食べきれないほど 持ち帰った。¹⁸

(52b)のようなケースは従来程度副詞との共通性から捉えられてきたが、(52a)のような単独の生起が可能であることから、程度を表す「ほど」(あるいは「くらい」)句を数量詞との同格要素としての側面を有するものとして分析する可能性も残されていると思われる。

残された課題は多いものの、このような、従来の分類をいわば横断する形での分析を積み重ねていくことで、これまでそれほど記述が進んでいなかったこれらの語群に関して、より豊かな成果が得られるものと思われる。

【注】

¹ 奥津(1966)では、「分からなければ白紙で出すまでだ」(同, p.24:(3))のような文末の「まで」は特殊な用法として考察対象となっていない。なお、「まで」の分類上の広がり及びその連続性については沼田(2000)参照。

² 以下、先行研究の例文を引用する場合、便宜上、表記の修正や下線の付加等を適宜行う。

³ 本稿では、ここで「タイプ」とした区分の位置付け、すなわち順序助詞という既存のカテゴリーとこの区分との関係の検討についてはひとまず保留した上で、現象の観察・記述を行っていく。

- 4 以下の分析では、「AからBまで」のA/Bに名詞（数量詞を含む）が現れる例を扱うが、「消費税を3%から5%まで引き上げた」のような「から=起点」「まで=着点」と解釈できるケースや「～から…に至るまで」のような複合辞の取り扱いを保留しておく。また、順序助詞句には「～動詞(テ形)から…動詞(ル形)まで」(例：朝起きてから夜寝るまで)、「Aは～からBは…まで」(例：北は北海道から南は沖縄県まで)のような形も存在し、これらも本稿の分析の適用対象になると思われるが、具体的な分析は行わない。
- 5 一見、両要素の隣接が問題のようにも思われるが、「8月初めから9月末までのんびりと2ヶ月休みを取った」のように間に別の要素が挿入されても同格解釈には問題がない。
- 6 奥津の分析では、「から」「まで」が単独で現れる場合は、両要素が始点/終点を表すことによって不定の量を表している、とされる(pp.34-35)。順序助詞単独の場合も、特に「まで」に関してはこのような数量詞性に基づいた分析が妥当であると思われるが、これまで格助詞とされてきた「から」「まで」との判別の問題を含めて、具体的な議論は別の機会に行いたい。
- 7 ここから、奥津(1966)が「意味的に矛盾を含んでいる」とする例「1番から50番までがひとりぼっちでそこに並んでいる」(p.37:(67))は、個別読みの解釈の可能性を残していると言える。
- 8 「3時から5時までが15分(ずつ)空いている」のような例は、「～時」を60分の幅を持つ一つの分離可能な要素として捉えた、集合タイプに属するケースであると考えられる。当該の順序助詞句が集合/非集合どちらのタイプとして捉えられるのかは、どのような表現がどちらのタイプになりやすいといったある程度の傾向はあるものの、実際の解釈には語用論的な要因が大きく関与し、順序助詞句の表面形式から必ずしも決定できるものではない。
- 9 ただし、「順序助詞句 - 数量詞」という順序を逆転させることはできない。この点については後述する。
- 10 この点に関しては、実際には話者による許容度のゆれがあり、また同じ順序助詞句でも場合によって許容度の幅が見られる。これは、この構造に関与する名詞や「の」の特性とも関係する現象であると思われるため、現段階ではこの問題の取り扱いを保留せざるをえない。
- 11 ただし、順序助詞句の直前に長いポーズを置き、「哲学の本を、(しかも)プラトンからサルトルまで(を)読んだ」「ボランティアが、(具体的には)高校生から会社員まで(が)大活躍した」のような形で解釈を行えば、ここで不可能とした遊離の許容度はかなり高くなる。この点についてはさらに検討を要するが、この現象とこのような操作を必要としない遊離数量詞のケースとは少なくとも同一視できるものではないと考えられるため、このような解釈の場合を除いて議論を進める。
- 12 江口(1998a)の用語。江口(1998b)では「不定的規定構造」とされる。なお、江口の分析では、ここで見るようないわゆる列挙・例示表現の他に、引用句、間接疑問節、不定詞(不定代名詞)もこの構造を構成する要素とされているが、ここではこれらの要素については言及しない。
- 13 筆者の判断では、(35d)の「の」文に関してやや不自然に感じられる。これは、順序助詞句の場合と同様の問題(注10参照)であると思われる。
- 14 この副詞的な要素同士の同格関係を集合タイプの場合のような同格関係と同一のレベルで扱うことの妥当性は検討されなければならないが、2つの要素が意味的に密接な内容を表している、2つの要素に「3時から6時までの3時間」のような連体修飾関係が成立する、という2点を考慮した場合、少なくとも単なる副詞的要素相互の語順の問題として処理できる現象ではないと思われる。
- 15 この仮定が正しければ、従来格助詞として分析されてきた「まで」の少なくとも一部は、数量詞と同格関係にある順序助詞句の構成要素であり、数量詞と同様の副詞的要素である、と分析できる。「まで」単独の場合(注6参照)に関しては依然問題が残るが、このような分析により、例えば、北原(1999)が「達成量Q」と共起する「マデ格句」として挙げている要素(例：「次郎がLGBを第4章まで120ページ読んだ」(同,p.185:(50b)))の数量詞との機能の並行性がより明確に捉えられる可能性がある。
- 16 不定的同格要素の場合は、数量詞の代わりに不定詞が遊離した環境でも同様のことが言える。
(i) 週末のキャンプには、アウトドアに強そうな奴を太郎なり次郎なり誰か誘おう。
- 17 遊離可能な「AからB」という形式も存在するが、これはある種の概数表現であると考えられる。
(i) a. 作業工程では、0.3%から0.5%{ /程度/??まで}の不良品が生じる。
b. 作業工程では、不良品が0.3%から0.5%{ /程度/*まで}生じる。
- 18 井本(2000)は、このような語順での「程度用法」の「ほど」句と数量詞との共起に関して、「ほど」句の前にポーズが必要であるとした上で許容できるとしている(pp.9-10及びp.23(注9))。この点については本稿注11参照。

【参考文献】

- 井本 亮 (2000) 「連用修飾成分「ほど」句の用法について」『日本語科学』8, 国立国語研究所, 国書刊行会
- 江口 正 (1998a) 「日本語の間接疑問節の文法的位置付けについて - 不定的同格要素として - 」『九大言語学研究室報告』19, 九州大学文学部言語学研究室
- 江口 正 (1998b) 「もう一つの連体・連用」『国語学会平成10年度秋季大会要旨集』国語学会
- 江口 正 (2000) 「「ほか」の2用法について」『紀要(言語・文学)』32, 愛知県立大学外国語学部
- 奥津敬一郎 (1966) 「「マデ」「マデニ」「カラ」 - 順序助詞を中心として - 」『日本語教育』9, 日本語教育学会(奥津(1996b)に再録)
- 奥津敬一郎 (1983) 「数量詞移動再論」『人文学報』160, 東京都立大学人文学会(奥津(1996b)に再録)
- 奥津敬一郎 (1986) 「(第1章)形式副詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 奥津敬一郎 (1996a) 「連体即連用?(3)~(4)」『日本語学』15-1~2, 明治書院
- 奥津敬一郎 (1996b) 『拾遺日本文法論』ひつじ書房
- 近藤泰弘 (1983) 「副助詞の体系 - 現代日本語 - 」『日本女子大学紀要(文学部)』32, 日本女子大学文学部
- 北原博雄 (1996) 「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」『国語学』186, 国語学会
- 北原博雄 (1999) 「日本語における動詞句の限界性の決定要因 - 対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論 - 」黒田成幸・中村捷(編)『ことばの核と周縁 日本語と英語の間』くろしお出版
- 立園洋子 (1984) 「～まで/～までに/～までは/～にかけて」『日本語学』3-10, 明治書院
- 丹保健一 (1982) 「否定表現の文法(3) - 助詞「カラ」との係わりを中心に - 」『三重大学教育学部研究紀要(人文科学)』33, 三重大学教育学部
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44-13, 大阪市立大学文学部
- 沼田善子 (1986) 「(第2章)とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 沼田善子 (2000) 「(第3章)とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 堀川智也 (1991) 「「マデ」と否定のスコープ」『言語文化部紀要』20, 北海道大学言語文化部
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2』角川書店

【付記】

本稿は、第14回軽井沢夏合宿(1999年8月17-20日, 於:長野県軽井沢)における口頭発表の内容に大幅に加筆したものである。発表の席上及び改稿に際しての様々な機会に貴重なコメントを下された方々に感謝申し上げます。